

# サトリの ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

長岡西病院緩和ケア部長  
村瀬正光さん

第17回



「どう死ぬか」とは  
「どう生きるか」なのです

むらせ・まさみつ 1971年、愛知県生まれ。2002年、藤田保健衛生大学大学院医学研究科博士課程修了。2011年、立正大学大学院文学研究科仏教学専攻修士課程修了。大学病院などで医師として10年ほど勤務した後、立正大学仏教学部に編入し、日蓮宗教師資格を取得。現在は長岡西病院緩和ケア部長、日蓮宗ビハラー・ネットワーク世話人、日蓮宗専任布教師。

だと感じています。

現在、厚生労働省から「緩和ケア病棟」としての承認を受けた病棟は全国に200カ所以上あり、入院患者は3万人とわわれています。長岡西病院のビハラー病棟は、全国で一番目にできた先駆者の病棟です。

## 残された時間をどう 生きたいかをサポート

治療に関しては、必要な情報を提供し、患者さんやご家族と話し合いながら決めていきます。「残された時間が少ない中で、どう過ごしたいのか」を尊重します。医師として苦痛を緩和するために治療を行うことは重要です。しかし、その治療で別な苦痛が生じることもあり、薬物だけに頼らず、様々なケアも行っています。患者さんの人間性と意志を尊重し、不必要な苦痛を与えず、十分な説明のうえ患者さんとご家族が望む治療・援助を行い、そして寄り添う。私がかかっていることです。

患者さんの平均在院日数は約50日。ご家族が無理して付きつきりで見られると、精神的に疲れてしまいう方もいます。ご家族の方には「無理をしないように」と伝えていきます。イライラしたまま患者さんの世話をするのでは、お互いに

とつて良い時間を過ごすことができません。やさしい気持ちになれるときにベッドサイドに行き、時間があるときに電話やメールで気持ちを伝え、心を寄り添わせることが大切だと感じています。

## 家族で「いのち」について 話すきっかけを作って

人間は、生まれたときから必ずいつか死ぬことが分かっています。その生命の有限性を意識すること、豊かな生をまっとうのできるのではないのでしょうか。また、豊かで質の高い生活を過ごすためには家族の協力が必要だと思います。家族同士お互い理解しているつもりでも、病気になったとき告知はどうするのか、延命処置をどう考えているのか、ご家族でも知らないことが多いことに気づくでしょう。健康なうちから家族で「いのち」について話し合うことが、質の高い豊かな人生を送るために必要なことだと思います。是非「いのち」について考える機会を作ってみてはいかがでしょうか。



ビハラー病棟内には仏堂があり、朝夕にお経が読まれます。「病棟に折る場所があることは救いになるはず」(村瀬先生)